脱プラ肥料 収量安定

飛騨市、コメ作りでの実証で成果

販売開始 飛騨地方で連携、普及へ

飛騨市は、市内で実施した脱プラスチック肥料を使ったコメ作りの実証実験の結果を報告した。プラスチックの代わりに硫黄でコーティングした試作肥料を使ったところ、プラスチック被膜肥料と同等以上の収量を確保できることが分かった。試作肥料は「清流の至豊（しほう）」として製品化し、販売を開始。市は他の飛騨2市1村とも連携し、脱プラ肥料の普及を目指す。

（山田雄大）

脱プラスチック肥料を使ったコメ作りの実証実験結果が発表された報告会＝飛騨市役所

プラスチック被膜肥料は「一発型肥料」と呼ばれ、被膜が時間の経過と温度によってはじけて中の肥料が溶け出すため、春に一度まくだけで効果が持続し、農家の負担軽減につながっている。一方、被膜の殻は分解されにくく水田から川や海に流出し、海洋汚染の原因となっている。そこで市は今年3月、肥料メーカーのサンアグロ（東京都）、JAひだと連携協定を締結し、脱プラ肥料の開発を支援。プラスチックに代わる硫黄は溶けて植物の栄養になるため、環境負荷が極めて少ない。

実証実験で使われた硫黄被膜肥料（サンアグロ提供）

実証実験は、脱プラ肥料を使ってもち米「たかやままち」を5軒の農家、コシヒカリを3軒の農家が担当した。その結果、収量は飛騨の平均値である10アール当たりたかやままち420キロ、コシヒカリ480キロの目標を達成。玄米の見た目も良く、味の基準となる「食味値」、「味度」も平均より高い数値を示した。

市農業振興課農業技術専門監の鍵谷俊樹さんは「味に特化した飛騨の米に適していることが分かった。飛騨2市1村にも働きかけたところ『すぐやろう』と言ってくれ、今後栽培した結果をフィードバックしてもらう予定」と話した。都竹淳也市長は「川上にあるまちとして、川下、特に海に対する環境保護に責任を持つことが重要。とてもいい一歩になった」と手応えを語った。

無断複製・転載を禁じます